ふ る さ と

丸岡　忠雄

ふるさとをかくす　ことを
父は
けもののような鋭さで覚えた

ふるさとをあばかれ
ふたたびかえらぬ友がいた
ふるさとを告白し
許婚者に去られた友がいた

わが子よ
おまえには
胸張ってふるさとを名のらせたい
瞳をあげ　何のためらいもなく
これが私のふるさとです　と名のらせたい

解放教育研究所編「にんげん」より

母 よ り

一九九四年六月九日の一夜の出来事が、その後の私を頑張らせ続けている。

翌日の第二学年部落問題意見発表会に学級代表となったM子。私は公の場で発表することについて保護者の了解を得ておこうと、電話をした。なぜならその発表原稿には、学習会に行きたいけど家族の反対があって行けないという切ない思いが書かれていたからである。その他にも、過去に家族や隣人が受けてきた差別が如実に綴られていた。ところが電話をしてみると、案の定M子は発表原稿を見せてはいなかった。「とりあえず原稿を読んでみる」という母の言葉で受話器を置いた。

しばらくして、電話がかかってきた。

「どうして区別をするのですか。どうして色分けをするのですか。どうして部落の子をピックアップするようなことをするのですか。どうして十三、四の子が差別の矢面に立たされなければならないのですか。かわいい我が子が差別を受けることは、親にとっては生身を引き裂かれるような思いなんだということがわかりますか。学校がそういう姿勢なら、明日は発表させません。学校にも行かせません。」

怒りの電話であった。親の子に対する思い‥‥。それが私にはわかっていたのだろうか。私は自らの思いをさらした。

「‥‥生徒が矢面に立つのであれば、我々教師はさらにその前に立たなければならないんだ。今我々教師集団がしようとしていることは、そういうことなんだ。すべての生命は大切にされ、尊

敬され、輝かなければならないんだ。‥‥」
我を忘れ必死に訴えている私がいた。いつしか涙がこぼれていた。そして時間とともに、心穏やかになっていった。互いに自らの思いを語り合う時間が過ぎていった。
「今のままでは、子どもは胸を張ることもできませんね。私たち大人が頑張らねばならないんですよね。昔の熱い思いがよみがえってくるようです。先生、明日発表させますからね。頑張らせますからね。先生も、本当に頑張ってくださいね。」
その充実したひとときは、私の頭の中を駆け巡り、床に就いてもしばらく寝つくことができなかった。その後M子は学年発表、校内発表と、自らの思いを語り続けていった。
　後日、M子から私に手渡された母親からの一通の手紙。その手紙は今もなお私の心を揺さぶり続ける。

『先生のような方々と出会えたことがたいへん幸せであることを娘も私も喜んでいる次第です。今までいろいろと差別されたことなどは、同情を引くようで切々と訴えるのはとてもいやだったのですが、聞いてほしかったのです。真剣に聞いてくださった先生に対する甘えかもしれません。あれほど私自身をさらけ出したことは、学生時代以来あまりなかったのですが、今は娘にできる限り語り継いでいきたいと思っています。子どもたちがどこまで消化できるかは不安ですが、きっと理解してくれることを信じて、子どもたちとこの問題に体当りで取り組んでくださる先生方に心からエールを贈りたいと思います。娘や先生方がくじけそうになった時は、今までの苦労を思い出し、頑張り続けてください。どうぞこのまま中途半端で終わらせないでください。先人たちがどこかでくじけて逃げ出してしまったように‥‥‥。
　きっといつかは晴れて堂々と「ふるさと」が言える日がくることを信じています。ほしいものはありません。ただ、皆同じ赤い血が流れている人間だということを、わかってほしいのです。』

学　校　長　あ　い　さ　つ

2　E　公　開　授　業